

故きを温ねて新しきを知る

名古屋大学 大学院理学研究科 中島 耕大

私は30年後にこの記事を、どのような面持ちで読み直すのだろうか？そもそも私は30年生きていない、20代半ばの者である。ましてや、研究に関しては青二才である。30年の移ろいを実体験に即して考えることは難があるのだが、「30年後の植物科学」に、一石を投げたいと思う。

1. 論文漁りが趣味の私

私が初めて植物科学に疑問を抱いたのは、微かな記憶を辿ると中学2年生の理科の授業であった。「動物では精子が卵と受精しますが、植物でも同様に受精します」と習った。中学の理科で習うのはせいぜいこれくらいである。授業の後に、花粉管がどのように雌の組織に誘引されていくのかを教師に質問したが、答えは得られなかった。それもそのはずで、まだ発見されていなかったのである。私はこの問いに対する答えを大学1年生の時に、何気なく論文検索をしていたところ知ったのであった。まだまだ謎に包まれているこの世界において、一体今までに何がわかっているのかを知りたくなり、論文を漁るのが一種の趣味になった。

2. 故きを温ねて新しきを知る

最近、私が見るところ、あまり論文と対峙している人がいない。飛びつくのは新技術や新事実ばかりのような気がする。どんな新技術や新事実とは言っても、天から突然与えられるわけではなく、古の形而上学から連綿と続くものの上に成り立っているのではないだろうか？例えば、メンデルの法則は一度認められず、消え去ろうとしたものの、ド・フリース、コレンス、チェルマクが、メンデルの法則を再発見し、今では遺伝学の基礎として根付いている。さらに、ブラウンは花粉から出てきた微粒子の振る舞いを観察し、彼の名に因んで名付けられたブラウン運動を発見したが、我が国においては、「花粉自身が水中で動いている」と誤って解釈していたという。我が国においては、誤解されたまま様々な分子の運動に関する理論が推考された時代もあったというが、今では誤解も解消され、分子運動論の揺るがない証拠となっている。例を探すと枚挙に暇がないが、新たなインパクトは古の余燼から生まれると私は信じている。つまり、故きを温ねて新しきを知る、温故知新である。さて、今日の革新的な技術の発展に伴い、研究は日進月歩である。多種多様な植物のゲノムが解読され、ゲノム編集技術も充実し、遺伝学的研究に拍車がかかっている。しかし、これからの時代は、遺伝学的知見を基盤に、創って理解するアプローチが関心事になるのではないかと私は考える。遺伝学的手法を中心とした解析では、必須因子の機能は推測の域を出ず、実働因子の真の姿はベールに包まれたままではないだろうか？私は実働因子の振る舞いを見届け

られることを願ってやまない。

最後に、30年後の自分に語りかけておこうと思う。新しいことは、やがて古くなり、古いことは新しくなって蘇る。